

“わが半生に悔いあり”

茨城大学工学部都市システム工学科教授 安原一哉

10年記念誌に、“Last decade”と題するエッセイを書いて、われながら、いい表題をつけた、いい内容になっている、と自己満足に陥っていたら、これが実は自己満足で、表題に偽りのあることに気がついた。しかし、もう修正することは出来ない。気がついたときには、手遅れである。後の祭りである。“文章を書いていくら”の商売をしている我々にとっては、実はこれは致命的なことなのである。



(筆者近影 Aug. 30, 2004)

では、何が間違っていたのか？答えは、英語の表題なのである。つまり、“The last decade”とは、“最近の十年”ということで、過去10年間を意味している。なのに、これを“来るべき最後の10年”の意味に使ったことが失敗の原因なのだ。おそらく、“The final decade”とか、“My final decade”とでもすべきだったのだろう。Nativeに聞いていてみないといけない。

さて、今回の表題である。“わが半生”と書いたが、60歳を迎えた人間が“半生”とはどういうことだ？と疑問の声が聞こえてきそうだが、それは、書き手の独断とご理解いただくとして、“悔い”があるとは聞き捨てならない、と今度は別の声が聞こえてきそうである。でも、失敗の無い人生は無いのと同様に、“悔い”のない人間なんていないだろう。私の場合、年を重ねるほど（こんな場合、加齢と表現するとかっこよく聞こえるようだが）生き続ければ続けるほど、後悔することが増えていく、という感じなのである。この際、私事は置くとして、後悔の種類の多くは大学での仕事にかかわることばかりである。

きっかけは、数年前のあるとき、知己の若い他の大学教員に学会で会って立ち話をしていたとき、如才の無い^{くだん}彼の“最近の先生の研究の中心は何ですか？いろいろおやりになっていることは知っておりますが・・・”とたずねられたときである。これは、私にとって大変ショックな質問なのである。軟弱地盤、圧密沈下、ジオテキスタイル、石炭灰、繰り返し荷重というキーワードに加えて、シルト、軽量土、海岸崖侵食、GIS、地下水などの新しいキーワードが加わった。こうして並べてみると、この人は何が専門なんだろう、と疑問を持つに違いない。こう嘆くとある人は、“”多彩にやられている、ということでもいい評価なんじゃないですか”と慰めてくれる。でも、退官のときまでには、“安原は・・・に国際的に高い評価を受け斯界に多大な貢献をした”といわれるようになりたいものと少し焦燥の毎日である。なくなられた畏友、半澤秀郎氏は”歴史に残る論文を書こうよ”と激励してくれた（本稿の後に彼への弔問のエッセイを添付させていただいた）。“The final five years”の間に努力せねばなるまい。

さて、今回は、地盤研究室開設14年目が過ぎるところで15周年記念同窓会を企画することになったが、実はそれなりの理由があつたのである。村上助手（平成6年赴任）の学位（平成15年9月、博士（工学））取得、小峯助教授（平成13年赴任）平成15年度土木学会論文集受賞、そして私自身の還暦（平成16年9月11日）とが重なったため、卒業生・修了生書誌にも呼びかけさせていただいた次

第である。お蔭様で、ご趣旨をご理解いただいていた皆さんの方に集まっていた。末筆ながら研究室を代表してここから感謝の意を表したいと思う。

< 亡き、畏友、半澤秀郎氏へ送る >

この機会に、亡くなられた畏友、半澤秀郎博士（元、東亜建設工業技術研究所所長）への弔問メッセージを付記させていただくことをお許し戴きたい。研究室の何人かのOBの方々がお世話になった経緯もあることをこの機会に知っておいて戴きたいとも思っている。

きっかけは Soils and Foundations

茨城大学工学部都市システム工学科 安原一哉

半澤秀郎さんと初めてお会いしたのは、もうずいぶん昔なので、今となっては、正確な年月日を思い出すことは出来ませんが「Soils and Foundations」に掲載された Aged clay に関する半澤さんの論文に対して、私が Discussion を出したのがきっかけでした。当時、私は北九州の私立大学に勤務していましたが、あるとき突然半澤さんから、私が出した Discussion の件で電話がかかってきました。「とにかく、一度あってお話ししましょうよ」というお誘いに乗って、何かのシンポジウムの折に東京へ出かけ会場で半澤さんにお会いしました。お互い名前は知っていました（と想像しています）が、顔を合わせるのは初めてでした。でも、初めてとはいええないほど、学会のセッション参加も忘れてすっかり話し込んでしまった記憶があります。

よく考えて見ますと、Journal を通じて親しく交誼を続けることができる友人を得るのは研究者としては無類の喜びの一つであります。畏友、Adrian Hyde 博士（Reader, Department of Civil & Structural Eng, University of Sheffield, UK）との長く親しい付き合いもそのひとつです。同博士と知己を得たのも、同氏が私どもの SF 論文に Discussion を寄せてこられたのがきっかけでした。傍目では首を傾げられるほど、以来長いお付き合いが続いています。

もともと論文で接する半澤さんの研究のスタイルは、実務に暗い私にとっては憧憬の対象であり、中身は何時も新鮮なものでした。また、同時に、豊かな国際性を感じさせてくれるものばかりでした。誰しもそうかもしれませんが、元来私は自分に無いものを持っている人には男女を問わず憧れのようなものを持ちますし、幸いにして、そういう人と親しくなることが良くあります。半澤さんもその一人でした。自分のスタイルや主張を持ってそれを貫く姿勢を堅持している姿は、私には決して真似ることのできないものでありました。ですから、憧憬とともに尊敬の対象でもありました。

一度お会いしてしばらく、不音に過ごしておりましたが、その後、1990 年に現在の茨城大学へ移ってから、久しぶりにお会いしましたら、すっかりやせておられて、「いやあ、安原さん、胃を 2/3 ほど切り取ってしまいましてね」とこともなげに笑って話されていたのを思い出します。それから、半澤さんの訃報に接するまで 10 年以上が経過していました。時の流れは速いものです。その間、2 回ほど茨城大学で学生たちに特別講義をしていただいたり、研究所で数名の学生の卒論の面倒を見ていただいたりしました。しかも、大変熱心にご指導をしていただき、今も言葉では言い表せないほど感謝の気持ちで一杯です。また、研究所の催しにも何度か招いていただきました。そのたびに、私のことを、「Country gentleman」といつてからかい酒の肴にされていました。しかし、それは、決して礼を失したのではなく、半澤さん一流の親しさの表現方法でした。豪放磊落のように見えて、実は細かい配慮のできる稀有

の人だったと今でも思っています。

半澤さんとのお付き合いのなかで思い出すことは色々ありますが、あるとき、お酒を飲みながら、“歴史に残るような論文を書きたいよねえ、安原さん”と誰に言うともなく呟かれたのを今も鮮明に思い出します。あとでそのことを伝えますと、“そんなことを言いましたか。ある時間から記憶が定かでなくて、もう、Another world へ行ってしまってよく覚えていないんですよ、アハハ・・・”と笑って受け流していました。今にして思うと、あれは、“書かなきゃ駄目だよ”という私に対する半澤流の激励の言葉だったんだなあ、と今更ながら彼のやさしさを感じるとともに、1語1語を思い出してはしっかり噛みしめています。“1編でも良いからそういうものを残さなければ”、と多忙な公務の中でも決して忘れたことがないくらい何時もそう考えることが出来ているのは、半澤さんのおかげだとここでも感謝の気持ちで一杯になります。

最近、人生のたそがれ時を迎えつつあることを自覚しながらも、“感動をするたくさんの機会に恵まれる人生であるとともに、人を感動させる人生でありたいね”と学生によく問いかけます。そのたびに、半澤さんを思い出すのは、半澤さんとの交誼を通じて知らず知らずのうちに彼から人生哲学や技術者哲学を学んでいたおかげなんだ、ということを実感しています。

半澤さんの激励に応えるためにも残り少ない教員生活(あと6年弱)を真摯に生きて、少しでも社会貢献できるような教育者・技術者・研究者でありたいと期している日々ではあります。

(平成16年5月7日)

「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光」

茨城大学工学部都市システム工学科 小峯秀雄

防災・環境地盤工学研究室 15 周年、おめでとうございます。主催者側にある教員の私が、祝辞を述べるのも筋違いかもしれませんが、教員になり本研究室の仲間に入れていただいて 4 年目ですので、先輩諸氏および在学生に対して、お祝いを述べさせていただきます。

さて、本寄稿文のタイトルはかなり仰々しいものですが、私の出身大学の校歌のある一節から付けさせて頂きました。先にも述べましたように教員生活に入って 4 年目ですが、目まぐるしい人の動きや変化に驚いています。私が赴任したときの 1 年生、たった 18 歳だった子供たちが、既に成人し 4 年生となり、現在、防災・環境地盤工学研究室でプロ顔負けの研究成果を挙げつつあります。1 年生の教養で数学を教えていた子供たちが、月例のゼミでパワーポイントを使って原稿も読まずに自分の考えを、研究室の先輩、教員の前で述べています。頼もしく思います。もちろん、修士課程の学生諸君は、さらに高度な思考と表現能力で、私たちを圧倒してくれます。そして、この研究室を飛び立ち、社会で活躍されている方々は、研究室というスケールに留まらず、地方自治体から国、世界のスケールで思考し行動されていることを、学会をはじめとする様々な場面で目の当たりにします。そしてまた、翌月の 10 月から、フレッシュな 3 年生が仮配属として研究室の仲間になります。研究室は、常に“集まり散じて人が変わる”場所です。しかし、我が防災・環境地盤工学研究室には“理想の光”があります。次世代に対する責任、社会への奉仕など、人それぞれ表現は異なるかもしれませんが、「人に感謝し人のために自分は何ができるか」を教員、学生それぞれが自問自答しています。これが“理想の光”です。いつ何時でも、楽しい時のみならず苦しく悩んだ時期を我が研究室で過ごした皆さんには、常に自分の“理想の光”を持ち続けていただきたい。下記に、2004 年 9 月 3 日～4 日に行われた今年のゼミ合宿の様子を載せました。毎年この写真に登場する人々は変わっていきます。しかし、その心に抱き仰ぐ“理想の光”は常に普遍であります。これを見失うことなく、ご活躍していただくことを祈念しております。



今年のゼミ合宿の様子（2004 年 9 月 3 日～4 日、かもしか荘にて）

11年目を迎えて

茨城大学工学部都市システム工学科助手 村上 哲

平成6年春、修士課程を修了し、この研究室へ赴任した。現在、博士の学位を持たず助手の仕事に就くことは極めて困難であるが、当時においてもややそんな嫌いがあったかと思う。そのような私を採用していただいた安原教授他、学科のみなさまに感謝したい。特に、学部・修士で取り組んできた課題が粘性土の繰返し挙動に関する研究であったので、安原研究室に配属が決まったときには、私自身も喜んだし、同級生も喜んでくれた。というのは、私が安原先生の信者であったからである。信者といっても宗教的なものではもちろんない。学部それから修士で取り組んだ粘性土の繰返し挙動に関する研究は、安原先生が多くの論文をご執筆され、研究の道標になったとともに、それ以上の新しいことを見出す研究成果を生む苦しみも同時に提供していただいた。結果的には重箱の隅をつつくような成果しか得られなかった。しかし、安原先生が書かれた論文の大きさが、それを乗り越えたいという意欲をかきたたせ、関連分野や他分野の研究への知識の習得へと誘ったことは、現在の研究生活に大きく影響している。修士論文では、具現化できなかったが、現在研究の1つとして取り組んでいる弾塑性構成モデルの思想は、実は、この修士の間に培ってきたものである。

11年前、安原教授、金澤技官、そして、私の3名のスタッフの研究室であった。実験が主体の研究室であったこともあり、初年度は修士研究と同じく実験が主体の研究テーマに取り組むこととなった。実験漬けとなる最初の1年間で、この研究室の研究力のさらなる向上と、私自身の30歳までに習得しておくべきことを考え、数値解析について、その基礎的勉強に取り組んだ。ここ5年間くらいの卒業生の諸君は、私が解析屋と思われているかもしれないが、弾塑性理論、有限要素解析、逆解析、空間解析などの知識は、茨城大学に赴任してから習得したものである。勉強してすぐ研究に活用できるかということそうではない。まずは、基礎的な勉強から、そして、簡単な演算を踏まえて、少しずつ研究ツールとして利用できるようになるわけだが、このような新しい取り組みについて、大きなご理解をいただき、関連する研究に従事できたことも、ひとえに、安原研究室の自由の発想とそれを支援してくれる研究環境がもたらしてくれたものと思う。

さて、平成15年に晴れて博士の学位を頂き、研究者としてのライセンスを頂いた。この間、安原先生をはじめ、研究室の皆さんには多大なるご支援を頂いたことをこの場を借りて、感謝申し上げます。今後は、安原先生からいつも言われている「一人前の研究者」になるよう尽力するとともに、安原研究室の発展と地盤工学への貢献を考え行動していきたいと思う。

Adrian Hyde 博士 (Reader, Department of Civil & Structural Eng, University of Sheffield, UK)

二人と一緒に老人になりながら二人ともだんだん破家になっていきますがいまからもずーと研究したりウイスキー を飲んだりできたら嬉しいです。

六十回目のお誕生日おめでとございます。

英鳥庵



(2001年8月イスタンブールにて)

『8年の歳月を越えて ~酒と徹夜と...~』

秋澤 賢

(平成5年度学部卒)

平成5年4月から平成8年3月までの3年間(学部+院)本研究室に在籍していました秋澤です。このたびの15周年同窓会の開催におかれましては、心よりお喜び申し上げます。安原先生をはじめ先生方のこれまでのご尽力に敬意を表しますとともに、この同窓会を契機として、今後ますます関係者同士の交流が活発になることを祈念いたします。

○近況報告

現在、私は栃木県庁土木部技術管理課技術調整担当というところに在籍しております。主に担当している仕事は、公共事業のコスト構造改革(コスト縮減)や新技術・新工法の活用推進に関することですが、仕事の具体的な内容は説明しにくいので省略です。ほとんどデスクワークのみですが、不定型な仕事なので面白くもあり大変でもあります。

○学生時代の思い出

まず思い出すことは、お酒をよく飲んでたなぁということです。研究室内で飲んだこともあるし、さかさとか風来坊とかあちこちに、気ままな時間によく出掛けていました。研究室内にお酒が好きな人間がいたのでよく強引に誘われていたのが原因です(逆?)。あと、よく徹夜ばかりしていた記憶があります。でも、さらによく思い出すと、昼夜が逆転していただけでした…。それから、学科棟内でのパーティー(外部の先生を招いた時など)や研究室対抗の各種大会(リレー大会等)…そうそう、安原先生の引っ越し作業の手伝いなんかもありました。論文を仕上げるのは大変でしたが、それ以上に楽しい思い出が一杯です。その他ここには書けない面白い出来事もたくさん思い出しましたので、これらについては、同窓会の時にでも…。

安原研究室創立 15 周年によせて

豊田 紀孝

(平成 5 年度学部卒)

安原研究室，創立 15 周年おめでとうございます。

時の経つのも早いもので，私が安原研究室を卒業してから 8 年近い月日が過ぎようとしています。

私が安原先生に初めてお会いしたのが，学部 1 年の秋でした。14 年前にさかのぼります。そのころの先生は，失礼ながら，非常にユニークな風貌をしていらっしゃいました。そうです，古い方々はご記憶と思いますが，パンチパーマに角度のついた細いメガネ，それに色シャツ。一步間違えると，世に言う“自由業”の方に間違われそうな感じでした。

講義の前，騒々しかった教室も，先生の来室と同時に一瞬のうちに鎮まり，私たちは緊張の面持ちで講義を受けたことを鮮明に記憶しております。講義の内容は，さっぱり覚えていませんが・・・。

それから 3 年経ち，私が研究室に配属された時の先生は，すっかり変貌されていました。『優しいお父さん』といった感じでしょうか。私たちは，その外観上の優しさに，時には甘え，時には恐れおのいたものでした。こんな逸話があります。

私が修士 1 年の時，北海道大学で国際学会と土木学会全国大会が続けて開催されたことがありました。私たち学生は後半の全国大会のみ参加させていただくことになっていましたので，前半の国際学会期間中（1 週間），先生が留守中の研究計画を真面目な顔で打ち合わせいたしました。みんなもっともらしい計画を立案していましたので，先生は安心して出張されました。しかし・・・。私たちは，先生が出発されるより前に北海道へ移動する計画を，研究計画より念入りに立案していたのです。先生が午後の便で出発される，従って私たちは午前中に出発。着陸地は千歳空港以外。完全犯罪のはずでした。

出発当日，思いも寄らぬアクシデントが私たちを待っていました。私たちの乗る飛行機が天候調整で出発時間が大幅に遅れたのです。しかし，空港内は大混雑。この中で先生と出会う可能性は 0 に近い，そう高を括っていたまさにその瞬間，目の前に『優しいお父さん』が立っていました。「お前たち，何をしているんだ！」優しい顔で問われました。大きなバッグを抱え，航空チケットを握っている姿を見られてはお終いです。しかし，優しい顔がこう答えさせてくれました。「先生を見送りに来ました。」

北海道旅行を満喫し，研究室に顔を出したとたん，先生から優しい顔で問われました。「僕の出張中の研究結果，どうなった？」（私たち）・・・」。

実験漬けの毎日々，秋澤君とゼミ直前に徹夜時間を競ってみたりと，苦い経験もいっぱいありますが，今となっては本当に楽しい思い出です。私の研究室生活がまさに青春時代そのものでした。

現在，東京電力にて神流川発電所の建設工事に従事しています。もっと真面目に勉強していればよかった，そう思う毎日ですが，研究室で培った精神力が自分を支えてくれています。

安原先生，研究室の皆さん，本当にありがとうございました。安原研究室，万歳！！

地盤工学研究室 15周年に寄せて

樋口 徹

安原先生就任 15 周年記念に添えて

中川 明

(平成 8 年度学部卒)

安原先生、この度は 15 周年おめでとうございます。

8 年前、昼と夜の区別がつかないまま卒業研究に勤しんでいた事を思い出します。

卒研中間報告では、「何をやっているのか理解しているのか！」など叱咤激励？罵声！？の言葉を数多くいただき、今でも恐縮している次第です。

地盤研究室は数多くの優秀な人材を輩出しているという話から、私もその一員に加わりたいと願って安原先生の下に入ったわけですが、「都市システムで一番過酷な研究室」という情報を逃してしまっていた事に気づいたのは、卒研が始まったころでした。若さゆえの過ち？だったのかもしれませんが。社会人になった今では、その事を教訓に生かして、「より良い情報を確かな目で」をモットーに生きております。

私は今、様々な分野の土木設計に従事しています。設計者の中には、地質調査会社が報告した地盤定数を精査せずに（何も考えずに）そのまま設計に使うケースが多く、構造物によっては過大または過小評価をしてしまうことがあります。地盤を数字でしか見ていないことになります。安原研究室を卒業したからには、土を見て判断できる土木設計者になることが、一つの答えであると信じています。

安原先生には、今後ますますのご発展ご躍進なさを心からご期待申し上げます。

室山 拓生

(平成 8 年度学部卒)

研究室 15 周年おめでとうございます。

わたしは学部・大学院修士課程と 3 年間に亘り、安原先生をはじめ、研究室の方々にお世話になりました。卒論・修論執筆の際には最後まで慌ただしく、多くのお叱りを受け、皆様にご迷惑をおかけしたことを思い出します。

研究室では、幅の広い、数多くのテーマがあり、各々が異なる研究内容についてディスカッションが行えたことで、社会人生活のスタートにおいて非常に有意義な知識が得られていたのだと就職してから気づかされました。あれだけのテーマを抱えて研究を進められるのもバイタリティー溢れる安原先生の力とそれを支える村上助手、金沢技官の力があってこそだと思えます。

私が卒業してから、小峯助教授も加わりさらにさらに強力になった防災・環境地盤工学研究室が、これからもすばらしい研究成果を残し、発展し続けることを信じております。

研究室創立 15 周年おめでとうございます。加えて、安原先生の還暦をお祝いできることをうれしく思います。私は学部 3 年生の研究室仮配属(平成 13 年 10 月～)の時からお世話になっておりますが、はや 3 年が過ぎてしまったのかと思うと月日の経つのは早いものだと改めて感じます。

地盤研について仮配属の頃から感じていたのは、学生同士仲が良いということと、先生との距離が近いということです。他の研究室に比べて飲み会等の交流の場がとて多い気がします。歓迎会や忘年会等のイベントもそうですが、中間報告会の後や特になにもない日でも突発的に飲みます。そういったなかで朝から夜まで顔をあわせ、互いのいろいろな面を見ているから仲良くなるのかなと思います。

この原稿を書いているのは、ゼミ合宿から帰ってきた直後です。ゼミ合宿といえば、メインは一応中間報告です。中間報告ほど先生方 3 人の役割分担ができていると思ったものではありません。私の指導教官は小峯先生なので、まず小峯先生が研究内容に関する不明瞭な点などを指摘して下さり、そのあとで、安原先生が穏やかな口調で研究の意義についてなどを質問して下さります。そして村上先生が「素朴な疑問なんですけど・・・」とって全く考えていなかったところを聞かれたりします。他の人の発表を見ていてもそうですが、先生の一人が怒ると、もう一人の先生がフォローにはいるなど、絶妙なバランスがとれていたりします。これは地盤研究室の特長だと思います。さて、そんな中間報告が終わったあとは、さっきまでの険しい表情がうそのようにみんなで夜おそくまで飲み明かし、2 日目の土曜日にはしっかり遊びます。私は 3 年ともかもしか荘でゼミ合宿を行いました。その年その年で違う雰囲気を感じることができてとても楽しかったです。これからも、こんな楽しい雰囲気を受け継いで地盤研究室のみなさんが成長してくれればいいなと思います。

最後に、地盤研究室の今後の発展を祈り、15 周年記念の挨拶とさせていただきます。



平成 14 年度卒業生一同

地盤研 15 周年に寄せて

地盤研 M 1 一同

(平成 17 年度卒業予定)

この度は、防災・環境地盤工学研究室創立 15 周年ならびにお誕生日おめでとうございます。私たちが在学中に、このような機会を迎えられることを非常にうれしく思っております。毎日多忙なスケジュールの中、私たちに御指導いただきありがとうございます。還暦を迎えられたといっても安原先生の日々の姿を拝見すると、還暦とは思えない程の体力や精神の持ち主であると感じています。

安原先生と初めて顔を合わせたのは、学部 2 年生の時の土の力学 の授業でした。土の力学といえば、単位を取得するのが大変な授業であったので、自分たちなりに必死に勉強??しました。その為か、学部 2 年のときはまさか地盤研に来るとは想像もしていなかったです。私たちが地盤研に始めて来たのは、学部 3 年の時の仮配属または 4 年の時の本配属でした。私たちが研究室に本配属されてから、早いもので 1 年半も経過しましたが、この 1 年半の期間に安原先生との思い出が……。色々なことを思い出しますが、一番思い出すことは飲み会での安原先生です。飲み会ということもあり、やや無礼講的な部分もあり普段では見られない安原先生がそこにはいました。(特に昨年の忘年会ではとてもレアな写真が撮れました)まだ、あと 1 年半は地盤研ではお世話になりますが、日々のご指導や中間報告会での鋭い指摘など、できの悪い私たちの面倒を見て下さいますよう宜しくお願いします。

最後になりましたが、くれぐれもお体には十分気を付けて下さい。いつまでもスマイリーな安原先生でいてくださいね 安原先生とはもっと飲み会がしたいです!(^^)!